

『ビヨンド・エジソン 12人の博士が見つめる未来』

最相葉月

●ポプラ社 一五〇〇円

活きのいい日本人研究者たちの夢の息吹

評者 翻訳家 鴻巣友季子

最相葉月というと、『絶対音感』『青いバラ』『星新一』といった傑作ノンフィクション群で知られている。絶対音感にしろ青バラにしろ、一般読者もなんとなくその存在は知っているが、決して派手なテーマではない。星新一については、ある意味、みんな知った気になって深く追究してこなかったテーマではなかったろうか。

自然科学、医学、情報科学など、十二人の研究者に取材したノンフィクション『ビヨンド・エジソン』も、地道な、しかし最先端の研究に次々と光をあてる趣向だ。

例えば、寄生虫学者の北澤は、「アスコフラノン」を用いてアフリカの睡眠病薬の開発を進めている。聞き慣れない物質だが、「酒の博士」こと坂口謹一郎の助手・田村学造が発見したもので、日本が世界に誇る発酵学が生んだこの薬がアフリカに届けば、発展途上国への純国産国際新薬第一号となる。いわば日本酒の研究成果が、遠い地の難病克服に貢献す

るかもしれないのだ。そう考えると、難しい医学の話にもがぜん興味がわいてくる。

それから物理学者の深澤倫子は、南極の氷床奥深くに眠っている「空気の化石」(クラスレート・ハイドレート)を研究している。南極の氷に含まれた泡は深い部分になると氷自身に重みで押しつぶされ、やがて透明な状態になる。その中に存在する百ミクロンほどのごく小さな結晶、これが空気の化石。これを分析すれば、大昔の大気組成、つまり古代生物がどんな空気を吸って暮らしていたのかわかるわけだ。

わたしが個人的に一番興味を引いた



さいしゅう・はづき一九六三年、東京都生まれ。作家。著書に『星新一』、『〇〇一話をつくった人』、『東京大学応援部物語』など。

れたのは、音声工学者・峯松信明による言語支援システム。

絶対音感のない「絶対音感の人」

一般人は、あるメロディを移調しても同じ音楽に聞こえてしまう。言い換えれば、絶対音感が「無い」とは欠落でもあるが、移調しても同じ音楽として聞くことができる能力とも言えるんじゃないか。さて、この絶対音感者と相対音感者の構図は言語にもあてはまると、あるとき

峯松は閃いた。現在の音声認識機はジャイアント馬場と身長五十七センチの人が発した「おはよう」を同一の言葉として認識できないそうで、これは、移調すると同一の音楽とはみせない絶対音感者と似ている。峯松はここから絶対音感と自閉症の言語認識障害を結びつけるに至り、現在彼らのコミュニケーションを支援するシステムを考案中である。

峯松の場合、最相の『絶対音感』

と、自閉症者であり動物学者のテンブル・グランディンの『動物感覚』という著書から、研究の着想そのものを得ることになったが、どの科学者にも「忘れじの本」というのがある。

十二人の科学者全員に、深い影響を受け座右の書となった自伝、評伝を挙げてもらい、その本にまつわる魅力的なエピソードをぐいぐい引き出していくところが、最相葉月の取材力の白眉でもあるだろう。

子ども時代に出会い再読するたびに読み方が変わる本がある(寄生虫学者の読む『シユバイツァー伝』)。海外の孤独な学究生活の中で救ってくれた本がある(古生物学者が読む藤原正彦の『若き数学者のアメリカ』)。学歴を取り去った自分に何が残るのかと苦しんだとき心の支えとなった本があり(脳神経科学者が読む、チンパンジー研究者ジェーン・グドールの自伝『森の旅人』)、また科学者を奮起させるような本がある(宇宙科学者が読む、チャレンジャー号の乗組員エリソン・オニツカの伝記『風は偉大なる者を燃え立たせる』)。

完結したサクセス・ストーリーではなく、未来の科学史に名を残すことになるかもしれない、活きのいい日本人研究者が揃い、現場のリアルな夢の息吹を感じさせる。

博士課程を終えた「オーバードクター」が甚にあふれ、若い研究者の大半が行き場を失っているという昨今の科学界を元気づける一冊だ。